

句集

壺中の天

こちゅうのてん

村高卯

Boh Murayama

村高卯君は所謂理系人間である。

初学、博識と智が働いて俳句に難渋した。好漢好学、天然自然世事を写生するのに己の言葉をもって諷詠すべく精進した。

年々を経て枯淡飄逸の趣を煇するに至る。

湯豆腐の角を大事にしたき夜

向後、無為恬淡の境に遊ぶか。

—— 荒木 甫

鮫
鰯
鍋
太
平
洋
の
波
荒
く

妻
癒
え
て
箸
二
膳
あ
る
大
暑
か
な

竿
先
の
た
だ
一
点
を
秋
の
川

入
壇
を
許
さ
れ
し
寺
曼
珠
沙
華

裸木に雀の大群止まりをり

焼葱に土の甘さのありにけり

如月や名取り免状妻の部屋

うすうすと阿武隈登る山桜

白鳳の伽藍の址や若葉雨

八月や吾にも介護保険証

螺旋の髭ある大根の辛さかな

短日や遅き昼餉の湯葉づくし

羽子板市に妻送り出し大欠伸

妻の出す手紙の束や猫の恋

す
う
と
し
か
鳴
ら
ぬ
口
笛
鶯
餅

病
て
ふ
減
量
手
段
春
の
風
邪

包紙の折皺増ゆる妻の雛

鍋島に考の年忌や花辛夷

日だまりに舟舫ひをり冬うらら

杭の背に渦二つ三つ冬の川

リラの雨上がるポストに集配車

山つつじ岩の裂け目を根城にし

鷺岩の青葉若葉に埋もれをり

白かんば新樹に鹿の喰みし痕

白萩を湿らす那智の滝しぶき

巖かや熊野古道の草の花

突
堤
に
鰯
の
群
の
寄
せ
て
を
り

飛
沫
た
た
て
紅
葉
の
峡
の
河
鴉

吊橋の上の落葉を踏みにけり

多段なしる滝に幾重の冬もみぢ

沖繩
二句

水槽に海鼠と錆びし手榴弾

美ら海やかぢきの腹に小判鮫

訥々と喋る本音や鮎の腸

母とせし蒟蒻問答うちは風

般
若
心
經
字
數
の
ほ
ど
の
汗
の
玉

妻
の
手
を
真
似
て
鬼
灯
揉
む
少
女

叱正の朱稿の遺筆盆の月

尾花剪る風はその場に残しけり

ひ
が
ん
花
薬
の
滴
に
朝
日
か
な

ち
ち
ろ
虫
壺
中
の
天
を
見
上
げ
を
り

帯
締
む
る
け
は
ひ
や
妻
の
舞
初

ふ
る
さ
と
の
寒
丸
餅
に
指
の
痕

新
緑
の
日
差
し
斑
に
踊
る
径

行
々
子
神
酒
掛
け
ら
る
る
帆
引
船

母の日のうれし涙の笑顔かな

蔓橋の丸太の隙や若葉雨

鬼灯をほぐせと母の利かぬ手に

水澄める川どこまでも雲の影

街角のそろばん塾や棟の実

敬老日靴紐確と締めたり

同窓誌 恩師の慈顔 冬暖か

手放せぬ車椅子なり 膝毛布

太箸を手に常よりもあるじ顔

不器用な遺伝子を継ぎ福笑

トルコ・エジプト 四句

モスクからムエジンの声星月夜

黒ぶだう奇岩の中の礼拝堂

綿摘みの農夫の白きガラベイヤ

婦人の日ミモザの花を贈る国

柿の木に柿やおまえのゐる空気

マフラーや鏡の中に父のゐる

名の街の紙灯籠や水温む

囀や風の丘なる美術館

一握の真砂に春を嗅ぎにけり

方円の水になるまじ卒業子

フイヨルドの羊の群や青りんご

万緑やしフイヨルドの海深き色

紅毛の人日焼貧るやうにかな

ブリッジに凭れ白夜の人となる

小
六
月
置
き
薬
屋
と
長
話

凍
空
の
皆
既
月
蝕
深
き
赤

自己主張苦手なをとこ冬帽子

迷子郵便の供養塔とや冬木立

著者略歴

村高 卯（むらたか・ほう） 本名・村高威司（むらたか・たけし）

1939年（昭和14年） 大分県大分市生まれ

1962年（昭和37年） 九州工業大学機械工学科卒業

2003年（平成15年） NHK文化センター俳句教室入会

2005年（平成17年） 俳句結社「鳴」入会

2008年（平成20年） 「鳴」同人

現 在 俳人協会会員

句集 壺中の天

2015年9月1日 第1刷発行

著 者 村高 卯

発行者 池田友之

発行所 株式会社 ウエップ

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-24-1-909

電話 03-5368-1870 郵便振替 00140-7-544128

印 刷 モリモト印刷株式会社

※定価はカバーに表示してあります ISBN978-4-904800-33-1